



セーラー服と水兵服

杉浦, 昭典

(Citation)

海事博物館研究年報, 41:38-41

(Issue Date)

2013

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006517>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006517>



セーラー服と水兵服

海事博物館 顧問 杉浦 昭典

1. セーラー服の起源

広く一般には「セーラー服の原型は水兵服である」と認識されている。しかし、正しくは「水兵服の原型がセーラー服である」といわなければならない。セーラー服のセーラーとは、その本義は水兵ではなく「帆船に乗る人」または「船乗り」という意味である。陸上で「馬に乗る人」が着る衣服を「乗馬服」というのと同様に、セーラー服は帆船の「乗船服」であって水兵服とは限らない。セーラー服が水兵服を真似たのではなく、水兵服がセーラー服を真似たのである。

婦人用乗馬服をライディング・ハビットというが、セーラー服はセーラーズ・ドレスまたはセーラー・スーツという。どちらも軍服としての水兵服のように身分や職種を表すものではない。単なるファッション用語であり、日本語で乗船服または帆船服とせず、セーラー服としたのは極めて適切な表現であったといえよう。

セーラー服の起源は、1846年9月2日、当時5歳の英国王子アルバート・エドワード（後のエドワードⅦ世）が母ヴィクトリア女王とともにロイヤル・ヨット＜ヴィクトリア・アンド・アルバート＞（1,034トン）に乗船した際に着用した子供の乗船服にある。王子の着たセーラー服は、英国グリニッジのナショナル・マリタイム・ミュージアムに保存し展示されている。

同ミュージアム1977年発行の小冊子『ザ・ドレス・オブ・ザ・ブリティッシュ・セーラー』には「……パーティ（王子アルバートの愛称）は、乗組員の服を作る仕立屋が見事に仕立て上げた新調のセーラーズ・ドレスを着用した。パーティが甲板上に姿を見せると集まった士官・兵員すべてが喝采し、彼の晴れ姿を大いに喜んでくれた。」と乗船当日に女王自身が書いた日記の一部が引用されている。

王室画家が描いたこの時の可愛らしい王子の絵姿が評判となり、これを原型としたセーラー服が

男児服として流行するきっかけになった。また、この絵とは別に、成人したエドワード王子がテニスを楽しむ光景を描いた1883年の版画には、大人たちに交じりセーラーズ・ブラウスを着て長ズボンを穿いた男児数人が遊ぶ姿があり、既にセーラー服が男児服として定着していたことを示している。

さらにもっと後の19世紀末または20世紀初頭と思われる頃のもので、息子（後のエドワードⅦ世）と孫（後のジョージⅤ世）と曾孫（後のエドワードⅧ世）に囲まれて椅子に座る晩年のヴィクトリア女王の写真が残っているが、女王に寄り掛かる幼い曾孫もまたセーラー服であった。

セーラー服のデザインは、やがて男児服だけでなく婦人服の襟ぐり（ネック・ライン）や胴回りにも応用されて新しいファッションを生み出した。ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムにある1886年の英国のファッション雑誌には、共にカンカン帽を被る男女のイラストがあり、男は両前背広だが、女は斬新なスタイルのセーラー・スーツを着ている。

日本語のカンカン帽は、麦稈（ばっかん）帽からの転訛だとか、叩くとカンカンという音がするからそう呼ばれたともいい、命名の由来がよく分からない俗語である。英語では、ボート遊びをする人が被ったことからボーターというが、婦人帽としてはセーラーとも呼ばれる。セーラー服のようなシルエットを有する服装をファッション用語ではミディ・ルックということがあり、セーラー服をミディ・ブラウスともいう。ミディとはミジップマンの略語で、海軍の士官候補生や商船の航海実習生のことである。またブラウスは本来シャツ型の仕事着を指す言葉である。

2. 水兵服になったセーラー服

英語のセーラーを水兵と直訳することにより、セーラー服は水兵服であり、セーラー服の原型が

水兵服であるという誤解を招いた。確かにセーラーには水兵という意味も含まれている。しかし、英米両国海軍で兵員の階級としての水兵に相当する公式英語名は、どちらもセーラーではなくシーマンである。

陸軍軍人を総称してソールジャーというが、その対語としての海軍軍人はセーラーである。長く現役の海軍軍人として勤務した後に老齢で英国国王になったウィリアムⅣ世（在位1830～37年）をセーラー・キングと呼んでいるが、日本語で水兵王と訳すことはない。船乗り王といってもよいが、やはりセーラー王というべきであろう。

英国海軍で初めて水兵服が制定されたのは1857年である。それでも他の諸国海軍より早かった。海軍士官の制服はもっと早く1748年に制定されたが、この場合の目的は、先行した陸軍士官の制服に対抗し、乗り組む軍艦の艦上ではなく上陸時の社交場における体面を保つためであった。

18世紀後半に水兵服の制定を推進するよう提唱したのは海軍の軍医たちである。窮屈な狭い艦内で肩を寄せ合うようにして、着のみ着のままの服装を改めることもなく毎日を過ごす水兵たちの生活環境は衛生上決して良くなかった。せめて衣服を清潔に保つことにより、少しでも水兵たちの健康を維持させたいものと心ある軍医たちが早くから考えていたのも当然である。しかし経済的な理由もあり、中々実現には至らなかった。

士官も兵員も制服ができるまでは当時の陸上社会と変わりなく、その階層に応じた服装をしていた。士官の制服が同時代の紳士服の流行に左右されたことはいうまでもない。制服ができるまでの水兵の服装は陸上労働者と大差無く、新調や修繕の機会に限られただけに極めて貧相だった。ただ17世紀以降、水兵はほとんど首にネッカチーフをかけ、胸元でネクタイのように結んでいた。単色で色合いはまちまちであるが、なかには水玉模様らしいものもあり、首回りの汚れ止めや汗拭きの他、上陸時には唯一おしゃれのポイントになっていたのかも知れない。

17世紀後半から、水兵は着脱が楽にできるような首回りのゆったりした両肩にかかるほど大きい襟のシャツを着るようになり、またシャツの上に背丈の短いジャケットを着る場合にはシャツの襟をジャケットの襟に重ねて外に出し、ネッカチーフ

フを襟の下に入れていた。その外観は後年のセーラー服の特色として背中に垂らす大きな角襟にも何となく似てはいるが、セーラー・カラーと呼ばれるセーラー服の角襟にはもっと別の根拠がある。

1857年1月に英国海軍はエドワード王子の着用したセーラー服を土台にしたデザインの水兵服を制定し、紺色サージのフロック、後になって着替え用の紺色ジャンパーを追加、同質の紺色ズボン、白ズックの訓練用ジャンパーとズボン、紺色ラシャのピー・ジャケット（ハーフ・コート）、絹の黒色ハンカチーフ（スカーフまたはネッカチーフ）、現地の気候に合わせて被る白または黒色の軍艦名を記すりボンを巻いた麦桿帽子および軍艦名を記すりボンを巻いた縁無しの紺色キャップなどを支給した。

フロックがセーラー服をモデルにした正規の水兵服であり、ジャンパーは同型の通常服、ピー・ジャケットは金ボタン付き両前開きで腰丈ほどの短い上衣である。水兵服の角襟には白テープの縁取りがあった。フロックは裾をズボンにたくし込むが、ジャンパーの裾はズボンの上に出した。なお水兵服はシーマンだけでなくペティ・オフィサーと呼ばれる下士官も着用したが、下士官の袖には階級章があった。

ところが、水兵服が支給された後もそれまでの慣習に馴染んで来た水兵たちは制定された服装規則をあまり守ろうとせず、支給された水兵服を勝手にデフォルメして上陸時のおしゃれを楽しむという傾向がかなりあったらしい。海軍当局は服装規則の遵守を繰り返して警告まで出したが、水兵たちの服装についての放縦振りは20世紀初頭まで絶えなかったという。いずれにせよ、英国海軍の制定した水兵服は他の諸国海軍にたちまち波及して模倣され、国による多少の違いはあってもセーラー服のデザインを基本とする類似の水兵服は水兵の軍服として世界中の海軍に定着した。

3. セーラー服のデザイン

英国海軍が軍服としての水兵服を制定するまで、軍艦における水兵の服装については、あまり厳しい制約がなかった。一応、艦長がその権限によって、乗組員になるべく見苦しくない服装を保

たさせなければならないということになってはいたが、水兵たちはほとんど思い思いに好き勝手な衣服を身に着けていた。大抵は、前借りできる給料の範囲内で、主計長が管理し定期的に艦内で販売された安価で画一的な既製品の衣類を購入したが、それすら買えない者は、有り合わせの布切れをうまく手に入れるか、薄い帆布を倉庫からくすねたりして、何とか着用できるものを縫い上げることによって間に合わせていた。

19世紀末近くまで、主力軍艦は帆走機能を捨て切れなかったため、水兵はすべて操帆要員であった。従って水兵の服装も自ずからマストの登り降りに順応しやすいものになっていた。何故か、風雨中や寒冷時におけるマストやヤード上での操帆作業に欠かせない防寒防水衣を水兵たちはグレゴと称した。グレゴとはその昔、ギリシアや東地中海沿岸の農民と漁民が用いたという厚みのある粗末な布で作ったフード（頭巾）付きの短いコートをいい、その形状はアノラック、パーカ、ヤッケなどと呼ぶ現在の防寒防水衣に似ている。

グレゴを着た水兵たちが激しい風雨の中でマストに登り、ヤードに渡って、風にあおられる帆を引き寄せて畳み込む時、いつしか頭に被ったフードも脱げて背中になびく。そんな水兵、というよりも帆船乗りの姿をイメージして出来上がったのがセーラー・カラーのデザインである。

セーラー服の特徴は、マストの登り降りの支障となるボタン類の無いプルオーバー（かぶり）方式の上着、背中に垂れる大きな四角い襟（セーラー・カラー）、Vネックとネクタイ風のネッカチーフであるが、中でも一番の特色がセーラー・カラーである。セーラー・カラーについての「風の強い艦上で命令を聞き取り難い時に耳の後ろに立てる」とか「長い航海で伸び放題の頭髪を束ねて背中へ垂らすので服が汚れるのを防ぐ」という俗説には全く根拠がない。背中に垂れたセーラー・カラーの下縁を真ん中で二つ折りにして両端と合わせ目を縫えばフードの形となり、帆船乗りの象徴としてのフードを模した飾り襟であることは明らかである。

ちなみに旧日本海軍の水兵には、正規の水兵服の他に普段着ともいえる事業服があった。セーラー・カラーを幅の狭い普通の襟に替え、ネッカチーフに代わるネクタイやリボンも無く、襟元を

紐で結ぶだけの水兵服に似た形のシンプルなデザインの白い作業服である。英国で最初に水兵に支給したという衣類の中にあった白ズック製ジャンパーの同類であり、旧日本海軍でも事業服をジャンパーと呼んでいた。

4. 水兵服制定以前の縞シャツ

後年の水兵服らしい服装が出現する前、17世紀半ばを過ぎた頃からの海戦の様子を描いた英国の絵画の中には縞柄のシャツを着た水兵の姿が散見される。大抵、赤白または青白の縦縞であるが、18世紀に入ってから横縞が多くなり、中には格子縞も見受けられるようになった。むしろ水兵の絵姿といえば縞模様のシャツが最も普通であった。

そもそも縞柄の衣服は、中世末期から近世初期にかけて悪魔的かつ呪術的な意味から従属的な象徴へと急速に移行し、たとえば召使いの身分を示すお仕着せのような服装に使われた。1500年前後、横縞は隷属のしるしであり続けたが、縦縞はヘンリーⅧ世が好んだように貴族的デザインとなり、やがてその後は一般化した。

水兵用既製衣類をスロップというが、17世紀初期から英国軍艦の水兵は、入手できる素材を使って自分の衣服を縫い上げるか、パーサー（主計長）が管理していたスロップ・チェストから販売されるスロップを購入するか、そのどちらかによって自分の衣服を整えた。パーサーは定期的の下甲板のフォアマストの前に持ち出したスロップ・チェストを開いて水兵たちにスロップを販売した。

スロップ・チェストには衣類だけでなく小物類や布生地も含まれていた。18世紀中頃のスロップ・チェストに例外なく入っていたのは縞柄のシャツと布生地である。メリヤスの縞シャツは紡績機械で大量に生産できるニット製品なので値段も安く、水兵たちにとっても求めやすかった。

スロップ・チェストの中身は品目が限られていたので、それに頼る水兵の服装は自ずから画一的にならざるを得なかった。水兵服制定以前の水兵たち、特にトラファルガー沖海戦に至るナポレオン戦争における様々な海戦を描いた絵画の中で、士官や海兵隊員の制服姿と対照的な格子縞または横縞のシャツを着た水兵の姿が目立つ筈である。

結 語

この論考は、横浜マリタイム・ミュージアムの企画展『セーラー服と縞のシャツ』における記念講演（平成19年11月10日）の要旨であるが、既にこの時点における海軍の水兵服は、昔ながらの伝統的なブルオーバー方式ではなくなっていたことを付記したい。帆船の乗船服すなわちセー

ラー服が、20世紀に入ってもなお水兵服の基本形になっていたのは、軍艦という狭い空間の中での行動に適していたからなのかも知れない。しかし徐々に変化しつつある水兵服が、セーラー服と全然異なる形になるのもそう遠くはあるまいと考えられる。